

第2回 近畿圏広域地方計画学識者会議(その1) 議事要旨

1. 開催日時：平成 19 年 5 月 23 日（水） 10：00～12：00

2. 場 所：国民会館 12F 武藤記念ホール

3. 出席者：別紙参照

4. 議事要旨

- ・ 6月15日に第2回検討会議を行う予定で、その際、近畿としてこのようなことは共同で取り組むということを経験いただき、それを踏まえて広域地方計画を作成していく予定である。前回の先生方の意見を踏まえ、関係者でも議論しながら本日の案を出しているが、まだ固まったものではないので、本日も先生方に忌憚のないご意見をいただきたい。それも踏まえて、ブラッシュアップさせ6月15日に臨みたい。
- ・ 我々が整理すると「 の拠点」など抽象的になるので、もっと具体的な意見があればありがたい。今回も関係する機関が出席しているので質問等もして欲しい。(近畿地方整備局)
- ・ 資料1の説明。資料1は関係機関で調整中のもので確定版ではない。先生の意見や関係機関の調整で磨き上げる過程のものである。また、検討会議での議論の材料となるもので、広域計画の本文に取り込まれるものではない。「目指す姿」はレベルの違うものを6つ書き上げており、続いて目指す姿と絡めた10個の「戦略」を示している。(事務局)
- ・ 議論の前に一点確認だが、「(仮称)関西元気プラン」はあくまでも仮称である。市民に「近畿圏広域地方計画」と言っても分かりにくいので、もっと親しみやすくするための名称として考えたものである。他に良いものがあればそれについても提案をいただきたい。(近畿地方整備局)
- ・ 資料はよくまとめていると思う。
- ・ あるメディアで40歳半ばの人と話す機会があったが、40代以下の人には故郷を懐かしむという思いが萎えてきているらしい。私は大阪生まれ、大阪育ちで大阪は大好きだが、大阪から東京に出て働いていると、故郷を懐かしむ心が薄れ故郷に足を運ぶ回数が減っていくのだという。そういうふるさとを思う心をどう復活させていくか。実際どうなのか若い方にお聞きしたい。関西を離れた若者が、また関西に戻りたいと思える圏域にする必要がある。
- ・ 戦略について、面白い戦略が挙がっているが、誰がこの計画を牽引して実現しようとしているのかが分からない。それぞれの地域には個性があるが、それを互いに言い合っているとまとまらない。こういう大きなことを推進して

いくためには、どこの地域・機関がリーダーになるかを明確にする必要で、そうしないときれい事を並べているに過ぎなくなる。

- ・ 東京は一都物語であるのに対し、関西は三都物語である。各々個性的な都市があり、時には協調しながら進めているが、全体としてのパワーが弱いのではないかと思う。関西には良いものがあるのにうまく活かされていない。対立している訳ではないがうまくまとまっていない気がする。各都市が持つパワーを結集して活かす構図を描かないと実現性が乏しくなる。(小田先生)
- ・ 大きく3つの意見をいただいた。1つは若い人のふるさとへの思い。これは後ほど意見を聞きたい。2つは誰が牽引していくか。これも後で議論したい。3つ目の関西は三都であるということは関係機関も同じ考えである。資料1の戦略10でその点に触れており、近畿として、それぞれがうまく役割分担して個性ある都市・地域を圏域全体で共有することを考えている。1つ目の質問だが、どなたかに意見を伺いたい。(近畿地方整備局)
- ・ 私は和歌山で生まれ育ち東京の大学に行ったが、都会の空気になじめず和歌山に戻り、現在和歌山で働いている。私の世代では故郷に対する思いがあると思う。(和歌山県)
- ・ 例えば、和歌山で生まれ育った人が東京の大学に行った後和歌山に帰ってくる場合は和歌山への思いは強いのだが、そのまま都市に居残ってしまうと故郷の思いがだんだん薄れていくということのようである。私はそんなことはないと考えているのだが。(小田先生)
- ・ 和歌山で生まれても和歌山でないと活躍したいという人はいると思うが、和歌山で生まれて別のところに行ってもやはり故郷でいろいろやりたいという人もたくさんいると思う。そういう人が故郷に帰ってこれない状態であるならば、帰ってこようとした時に故郷でも十分生活や活躍できる場を用意することで、そのような選択ができる圏域であるということ的近畿は目指すべき。そのようなポテンシャルはあると思う。(近畿地方整備局)
- ・ うまく整理しているが、10項目は多いと思い、もう少し集約できる部分はあると思う。
- ・ 「本物」とうたっているが、近畿には原生的自然はほとんどなく、自然と人間が一体となって作り上げた二次的自然がほとんどである。二次的自然を「本物」を支える底流として捉えてみたらどうか。京都の周辺でも薪炭を千年以上運び込んできた訳であり、その結果アカマツ群という生態系が出来上がりまつたけの産地にもなっている。そういう自然の構造がここ50年で崩壊している。そういう二次的自然と文化、伝統を関連づけて本物を考えると、戦略1、2は集約できるのではないかと考える。

- ・ 戦略3については、ナノテク、特に膜技術が関西でも進んでいるので盛り込めばどうか。
- ・ 戦略7については、水フォーラムだけに限らず、京都議定書や、総合地球環境学研究所、UNEP、ILEC（国際湖沼環境委員会）などがあり、もっと環境全般に関して重みを持っていると思う。
- ・ 戦略8、9については、都市再生、自然共生のブレークダウンだが、都市がコンパクト化していく中で、土地と水はもう少し楽になるので、これらをどう再編、整備していくかが計画の基本的な考え方になる。また、関西で言うとヒートアイランドが象徴的な問題であるが、例えばコウノトリについては、コウノトリだけの問題でなく、それが頂点に立てるような生態系全体を大事にすることが重要であるし、ヒートアイランドもヒートアイランドだけの問題でなく、これを軸にしてエネルギー、環境を考えることが重要である。ヒートアイランドについては都市での温度上昇のことだけがよく言われているが、周辺部にクーリングスポットができていることも問題である。都市部と周辺地域の気流の循環についても考えるべきで、この循環の道が、河川のネットワークである。そういう意味で、現在、水と緑のネットワークを形成する最大のチャンスだと思う。そういう形での都市のリニューアルも考えられる。盆地が連なっている近畿独特のランドスケープを示すと重みがでてくる。（三野先生）

- ・ 議論するために分かりやすいということで「(仮称)関西元気プラン」というのはよく分かるが、元気、元気と言ってきてくたびれた感がある。元気という言葉が関西に合っているのだろうかと思う。生活の質を豊かにして成熟したライフスタイルを目指すならもっと豊かなイメージのものが良いのではないか。無理して元気ではなく、次世代の生活や産業を考えれば成熟をイメージした別の言葉の方が良いかもしれない。
- ・ 目指す姿 で、東京一極集中を是正するためのもうひとつの中心核となるがあるが、以前から双眼構造は違うと思っており、一極集中を是正するための中心核ではなく、一極集中は是正できないという前提で東京とは違う空間を作るという意味で考えた方がいい。そういう意味での中心核であろうと思う。
- ・ 次回のサミットの議論になる環境は外せない問題であり、目指す姿の中に「環境」を入れるべきである。
- ・ 戦略2について、歴史街道構想とどのように違うのか。またアジアから来られる人は違う観点で意外な場所に観光することもあり、違う視点で観光を考えることも必要と思う。
- ・ 戦略3について、2020年には20%、2050年に50%CO₂削減という方向がある中、技術立国として環境技術からの解決がある。関西はリサイクル技術、ESCO事業、有害物質の廃棄、CO₂の貯留技術などを培ってきたので、今は燃料電池しか挙がっていないが、環境技術も加えるべきである。
- ・ 戦略7について、文章の流れでは水循環に関することが先に述べられている

が、その後の文の地球環境技術を中心に取上げた方が良い。また、水系に関して、河川の問題や海の水質問題に関しても、中国などアジアに対するモデルとなりえると思う。関西はI G E Sの関西拠点もあり、環境のポテンシャルを持っている。

- ・ 戦略8の二地域居住を容易にすることは面白いが、この中でいう他圏域はどこを指すのか教えて欲しい。
- ・ 戦略9について、内容はその通りだが、文章から品格ある創造都市とは単に犯罪のない都市だと読み取れてしまう。また文章中の低未利用地について、尼崎の森は面白い取り組みと思う。品格のある都市とは美しい自然や緑があることではないかと思う。海外でもそうだが、自然を再生させることが品格のある創造都市になると思う。大阪より東京の方が緑があって落ち着く。大阪育ちだが以前から緑が増えていない。ビルがあっても相当量の緑がないと都市の品格にならない。そうしないと海外からの人や次の世代の人に良いと思ってもらえない。(槇村先生)
- ・ 他圏域について、特に国境は意識していない。今は近畿以外という意味で考えている。(事務局)
- ・ 自己実現の場という表現も抽象的で分かりにくいので、それも合わせて考え直したほうがよい。(近畿地方整備局)
- ・ 前回もお話ししたが、環境と資源循環という観点が欠けていると思う。
- ・ 目指す姿を見ると少し肩がこる。元気も必要だが静かに生きていくことも必要。1人あたりの県民所得もトップクラスではないが、文化や自然に恵まれている豊かな地域であり、そういう中で人口減少社会を生きていきたいというイメージで本物を大事にしていこうというのであれば、タイトルに少しズレがあるように思う。
- ・ 日本の自然は実は半自然である。近畿圏は都市の域内には緑が少ないが、少し郊外に出た周辺は自然に恵まれており、これは近畿圏の強みである。しかし過疎化や地域産業の停滞、高齢化などで耕作放棄地が増えており、これからの地域産業や農林業をどうするのかという問題がある。それらは美しい自然景観のベースとなるものなので、ここの言及をもう少しするべきである。
- ・ 戦略3について、高付加価値産業ということで最先端産業ばかりが例に挙げられているが、環境産業やバイオマス、地域の伝統産業などの言及もほしい。
- ・ 戦略8について、他圏域は近畿圏以外だけということだけでなく、近畿圏内でも人を動かしていくことが必要である。そう意味では二地域居住などが考えられる。そのためには人を受け入れる地域の魅力付け、情報発信が求められており、自治体間の競争も必要になってくる。
- ・ 戦略10の中で、下から地域の個性を発見し、発信していくということも盛り込められたらと思う。(桂先生)

- ・ 40代として意見を述べるが、今後海外に行って日本に帰れなくなったとした時に一番懐かしく思う風景はどこかと聞かれた時、現在住んでいる京都ではなく生まれ育ったミナミのネオンサインと答えた。生まれ育った人だけでなく短期間住んでいた人でも故郷と思ってもらえるような地域づくりが大事で、歴史の浅い都市ほどそういう傾向であるが、京都などは何代住んでもなかなか京都人と認めてもらえない。そういうことは問題で、他の地域から来た人にも地域への思いを持ってもらい、ふるさとだと思えるような地域づくりを目指していくのが良い。
- ・ これまでの全総や自治体の計画も含め、今までの方向性で何を継承し、何を換えようとしているのかを、目指す姿でクリアにしていくことが必要である。
- ・ 「(仮称)関西元気プラン」について、「関西」という言葉を前に出すのは覚悟がいる。かつて関西は関所の西ということで、名古屋も福岡も含まれ、関西に住んでいる人は自分たちの住んでいる地域を関西とはあまり呼ばなかった。自ら関西と呼ぶのは地域に誇りを持たないということで否定的であった。しかし、国際空港の名前にもなり、このような舵をきられてきたので、それを踏まえてどうするかを考える必要がある。
- ・ 目指す姿 について、関西が日本のアイデンティティを背負って立つという覚悟はいいが、「 となる」というのではなく、既にそうなっているので、その後次のステージでどうするかという観点で目指す姿の表現を変えて欲しい。
- ・ 戦略9については問題があると思う。創造都市の定義はさまざまではっきりしていないが基本的には産業政策からきている。大量生産型の産業だけでなく芸術や文化、NPOやコミュニティビジネスを含めた地域に根ざした付加価値のある産業活動をするという状況を創造都市という。またアメリカで議論されているような知財、デザイン等の産業を振興するために創造的な基盤を整備し創造的な人材を集めることも言う。中国での政策では文化創意産業の振興策である。創造都市については、市民参加や犯罪のない品格のある都市といった内容の9ではなく、3の産業の方にも盛り込んだ方がいいと思う。創造都市の扱いはもう少し詰めたほうが良い。また、リニューアルという言葉も疑問である。関西は既にクリエイティブな都市であり、これまでも大量生産だけでなく多品種少量の市民が主体となった活動をしてきている。
- ・ 戦略3について、医療、サイバーアート系、ナレッジ系が抜けており加えるべきである。あと、産業の核というのは基幹産業という意味だけでなく、関西のエンジンとなるべき産業も考えないといけない。従来の垂直型の産業構造でなくではなく水平型の分業になっているので、そういう観点でも考えるべき。シームレスと言う表現で対応できているとは思いが。
- ・ 戦略2については、他の戦略とレベルが違い、共同プロモーションなど具体的でベタな表現になっている。「世界に通用する」のはどういうことなのかを考え、世界の人に憧れを持ってもらえるようなイメージで、もう一息何か工

夫をした方がいいと思う。

- ・ 元気が成熟かという話があるが、成熟だけでもない。少し元気が出てきた現在、元気と言うキーワードだけで言い表せるのかを考えるべき。(橋爪先生)
- ・ うまく整理されていると思うが気がついた点を述べたい。
- ・ 大学は東京であったが、住むのは嫌だと思ったのは山が近くにないところである。関西は高密度な都市空間と多自然の環境が隣接している。
- ・ 全国計画の報告書素案の中で新しい点として、「新しい公」「都道府県を越えた広域的な計画」、「アジアゲートウェイ戦略」などが位置づけられている。それと今回の資料を見比べて考えてみた。
- ・ アジアゲートウェイなど大きな戦略については、関西は東京と分担してもいいと思う。戦略4については良いと思うが、戦略5についてはアジアだけでいいのかと思う。関空はアメリカとの関係が弱く、関空とアメリカの直行便はホノルル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、デトロイトの4本しかない。アジアだけでなく、日本とアメリカ・ヨーロッパとの関係も考えるべき。ゲートウェイ構想は東京との分担で、関西が弱い部分をフォローする戦略を考えるべき。ヨーロッパ・アメリカでは国際空港とつながる公共交通機関が24時間動いているなど国際空港を支えるための施策がしっかりしており、関西で都市の国際機能、国際空港を支える戦略を考えることが必要である。
- ・ 府県を越える広域的課題が増えている中、サミットの誘致の例でもあるように、関西のような多核型の構造は強いはずなのに強くなっていない。それぞれの都市の利害が対立して力が分散されていることが気になる。力を結集して本来持っている力を発揮するべきで、協力して地域の魅力づくりを行うことが必要である。そのためには意志決定を行う機構やエージェンシーが必要となる。戦略10ではそこまで踏み込んでいない。福岡や北九州が関西と似ているが、近畿よりも連携してやっていると思う。諸外国でもアメリカでは交通政策、地域環境、ごみなどの問題について行政区画を越えた意志決定機構MPOがあり、そこでは大きな権限や責務が与えられている。また、フランスの運輸組合、スペインの地域運輸コンソルシオなどもある。そのような機関で決まったことは力があり、実行に移されるものである。日本にはこういう機関がない。一都型の東京では必要ないかもしれないが、近畿ではこういった機構が必要だと考える。そのことに関して戦略10に組み込んでいくべきである。(斎藤先生)
- ・ ふるさと納税の話について、大都市の知事が反対している中、大阪府知事も反対していたのは残念だった。大阪のアイデンティティをPRできる絶好のチャンスだったと思う。
- ・ 若い人が自分のやりたいことをするために海外も含め住む場所にこだわらないことは、可能性の広さであり悪いとは思わない。だからといって自分のふるさとへの思いが消えるわけでもないと思う。東京に行っている人の話では、

仕事の面では良くても、決して幸せを感じているわけではない。通勤など生活環境も良くなく、ほとんどが単身赴任を余儀なくされている。関西でこんな暮らしができるというのは売りになると思う。元気が成熟かという問題で、関西は現役を退いた人が静かに暮らせるというだけのところではなく、現役が仕事で自己実現をしながら自分の生活も保障できる地域ということは売りになると思う。そこの売りがうまく打ち出せていない。成熟というのはキーワードになると思う。成熟は衰退ではない。一極集中を是正するための地域核ではなく、一色ではない暮らしや産業を実現できる全く違う中心となるという方が個性的になる。

- ・ 戦略をアットランダムに整理するのか、大項目を立てて整理するのか、どちらが分かりやすいかということを考えていた。
- ・ 近畿の強み、売りは何で、それをどう活かすということについて、もう少し具体的に書く方が良い。例えば戦略1で「こだわりのライフスタイル」と書いてあるが、何にこだわるのかが明確になっていない。多中心のある多角的な都市構造でどんなライフスタイルが実現できるのかを具体的に示すと戦略が立体化する。
- ・ 誰がこの計画を担っていくのかも表した方がよい。「新たな公」がこのように連携して実現するといった主体についての論議が必要と思う。また情報発信力が弱いことが近畿圏の弱みであるので、広報戦略の強化も必要と思う。(狭間先生)
- ・ 戦略10の考え方はいいが、役割分担と機能分担は違う。タイトルは役割分担であるが内容は役割分担と機能分担が整理されていない。機能分担をすれば近畿圏内で一極集中がおこりかねない。個人的には役割分担を強調した方がいいと思う。(三野先生)
- ・ 高野山や比叡山、寺社仏閣など伝統あるものが関西に多く、伝統や文化、先祖の知恵を今や未来に活かすことも考えるべき。関西は精神文化のメッカ、拠り所と考えている。高野山、熊野古道、比叡山、琵琶湖といったオンリーワンのものが関西にはたくさんある。それらをもう少し見直して圏域の売りとし、他の地域との差別化を図っていくことが必要。伝統、精神性を埋め込んで欲しい。
- ・ 教育について、人材育成という形でちりばめられているが、関西には大学が多いことも勘案し、教育を通じた人材育成についても盛り込むべきではと思う。(小田先生)
- ・ 「元気プラン」は保険の名称のよう感じで、もう少し違う表現の方が良いと思う。例えば、美しさ、うるわし、美しいと書いて「うまし」などが考えられ、奈良県がよく使うような大和言葉などを参考にできないかと思う。
- ・ 関西は西日本全てを担うという気概を表すものであり、近畿圏より大きな意

味となる。(橋爪先生)

- ・ 関西は日本全体の中で存在価値の高い場所である。そういう意味で日本全体からの期待も大きいと思う。関西からみると東京や北海道、信州、長崎、広島などがブランド圏であるが、全国からみると関西は特別なブランド圏である。計画に、全国民からの期待を実現するものを組み込むのが使命だと思うので、その点も配慮してほしい。(斎藤先生)
- ・ 主体について、例えば、ドイツとチェコなどでは国境を越えて組織を作ってグリーンツーリズムを推進している。日本はどうも縦社会だが、横のネットワークを活用して協力しあうことが重要である。
- ・ 品格について、都市だけでなく、農山村の品格も欲しい。例えば国道沿いの看板などは景観が悪い。都市に限らず近畿圏全体が品格を持つような表現にして欲しい。(桂先生)
- ・ 広域連携について今後新組織もできる予定であるが、これからの課題だと思っている。経済界は自治体の枠を越えて活動しているので、その視点からも考えていきたい。(関経連)
- ・ これまでもいろいろ計画があったが、なかなか連携ができていない現状がある。今回は役所以外の民間の企業や住民の方にも参加してもらおう計画であるが、立派なことが書かれているがそれは実現できないと思われる恐れがある。関心を引くにはかっこよさも必要かもしれないが、本当にできることを書かなければいけない。この辺りのバランスをどうすればいいか。(近畿地方整備局)
- ・ 夢を描くことも大事だが、アクションプランを作って実行することも重要である。そのためには意思決定機構が必要である。各府県のエゴを捨てて本当に近畿のためになることをやるという意味決定機構が必要である。大阪でも京都でも神戸でもよいが、どこかが盟主(リーダー)になってやらなければならない。そうしないと絵に描いたもちになる。
- ・ 一般の人が計画を読んでがんばろうという気にならないと実現しない。「協争」という考えを多くの人に共有してもらおうことが重要である。(小田先生)
- ・ 広域でできることで大事なものは、地域で成功したモデルを全圏域で応援し、全圏域の資産として広く打ち出していくことと思う。重点的に圏域全体で考えていくような突出したタネはどこかにある。例えば近江八幡の文化的景観、京都市の景観行政などがあるが、他の地域がそれに倣うのではなく、圏域全体で応援し、全体の誇りとして高らかに掲げ、可能であれば他の地域もそれに倣うというのが良い。観光で言えば、大阪におけるアジアからの修学旅行

生数日本一を目指す施策の重点化や、平城宮跡での取り組みがあるが、ある地域で頑張っていることをいかに近畿全体でサポートしていくかが重要となる。圏域を越えるプロジェクトとして今できていることをいかに夢として描くかが必要である。(橋爪先生)

- ・ 計画にはいくつかの解釈があって、実現できることを並べて実現させることだけが目的でなく、近畿圏が目指すビジョンを共有する手段としての目的もあると思う。(三野先生)
- ・ この計画が市民の暮らしにどう関わるのかよく分かるようにしてほしい。そのためには担い手を表す必要がある。単に行政サービスを受けるだけという市民ではなく、自分がどう参画していけるのかが分かるような計画であれば良いと思う。裁判員制度に関わるようになったが、司法制度は以前かなり市民との距離あったが、大分変わってきている。市民はサービスを受けるだけでなく、どう参画していけるのかを考える時代になっており、そのような形で「新たな公」を考えればと思う。(狭間先生)
- ・ 近畿では耕作放棄地が増えてきている。農山村では人口減少のスピードが早く、高齢化も深刻で、農地、森林の維持管理が難しくなっている。地域の持っている資源を管理、継承しないと魅力ある圏域ができないと思うが、その点について意見をいただきたい。(近畿農政局)
- ・ 現実はその通りである。農業関係者も担い手づくりをしているが、高齢化が大きなファクターとなっている。最近では都会からどうやって人を呼び込むかということをやっているが、地域独自の農産物の売り込みが不足していた面もあったと思う。農山村は内向き傾向であったが、都市から人が来ると魅力の再発見ができる。例えば、農産物を加工し、商品化するなどといった都市とのつながりができると活気がでてきて担い手を集めることができる。悲観ばかりではなく、創意工夫ある取り組みをいかに元気づけるかが重要である。(桂先生)
- ・ しばらくはそういった形でも良いが、どれぐらいの期間を考えるかによる。空間の再編成を考えると、可能なところと不可能なところをうまく分け、コンパクトシティとしてどう再編していくかと並行して、どう自然を回復していくかを考えることも時間軸を長くとるのであれば必要なことと思う。時間軸を考えるにあたり、短期間で何ができて、長期間で何ができるか考えることも必要で、計画を具体的にどう進めていくかによるものである。市民参加については、もうすでに市民が行っている活動も多くあるので、「新しい公」としてのアイデアを取り上げたら良いと思う。(槇村先生)